

卒業論文

日本の幸福度変遷から考察するヒット曲の本質

早稲田大学政治経済学部国際政治経済学科
映像ジャーナリズム・高橋恭子ゼミナール
4年廣澤孝昭

概要

誰もが口ずさみ広められる歌謡曲は我々の生活の一部であり、人々の心の内を表現しているとも言える。なかでも一般的にヒット曲とされる歌謡曲は時代に生きる人々に受け入れられ、評価されているため各年代の大衆の心情を表している。本研究ではヒット曲の歌詞を年代別に分析した上で人々の心情を読み取り、各年代の人々の幸福度との関係から分析・考察し、「何がヒット曲をヒット曲たらしめるのか」というヒット曲の本質に迫る。

私自身、幸せを感じている状況に敢えて気分を落とすような悲観的な楽曲を聴くことはないように感じたため、「人々は生活の幸福度が高いほどポジティブな楽曲を求め、ネガティブな楽曲を避ける」という仮説を立てた。仮説立証がされた場合、「そもそもヒットとは何を指すのか」「ヒット曲はどのようにして生まれるのか」といった現状明確な答えのない事象の本質に迫ることができるだろう。

分析では東京工業大学の高村大也が作成した「単語感情極性対応表」を用いてヒット曲の歌詞を分類及びポイント化し、フリーソフトウェア「KH Coder」によって軽量テキスト分析を行った。また人々の幸福度指標には1975年から2018年にかけて長期のデータがある内閣府によるWEB調査結果を用い、国際連合が定義する幸福度との類似性が極めて高いため内閣府調査における「現在の生活における満足度」を用いることとした。

本論文は4章構成である。序章では仮説や研究の意義、第1章では先行研究を紹介している。第2章では本研究におけるヒット曲や幸福度を設定し、対象とした歌謡曲を軽量テキスト分析によって数的な分析を行い、2008年以降、ネガティブな歌詞とともに恋愛を意味する歌詞が継続して減少する傾向が確認され、これは幸福度が増加傾向にあることと負の相関にあることが判明した。

第3章では軽量テキスト分析では可視化されない歌詞のミクロなニュアンスに焦点を当てた。2008年以降は上昇する幸福度に反してリーマンショックを皮切りとして社会的に不安の募る時流であったことを受け、人々が評価し受け入れる楽曲は幸福度に通じるものばかりではなく、社会的な出来事やそれによる心情に寄り添った楽曲もその一つではないかという仮説が新たに生まれた。そこで質的分析を行った結果、ロングヒットを収めたGReeeeNの「キセキ」をはじめとして未来に対して前向きな歌詞傾向が確認された。また分析結果からヒットの要因についてその複雑性が確認されたため、3章3節及び4節では先行研究ではカバーされていない2013年以降の情報通信機器の発達といった観点やプロデューズ視点から、現代の複雑化する音楽業界やヒット曲について考察している。

最後に総論として第4章を設定し、序章から第3章までを纏めた。本論文では日本の音楽市場を前提に研究を進めたが、グローバルな音楽市場においては日本で成長しつつあるデジタル配信が既に完全に主軸となっている。音楽市場がめざましく変化を続けるのに対し、ヒット曲が持つ社会的な本質を示すことが今後とも求められるとして、本論文を締め括った。